

Hatta
Kogarashi

夜ざり

八田木枯句集

本集は私の七十代の作品集で、当然の事乍ら老の句もかなり収めてある。老の句を意識して詠まないという人もいるが、ここまでくれば極く自然に老を詠めばいいと私は思っている。青春の日に青春を讀んで詠んだように、滋味ふかき老を詠みこなしたいと念じている。

八田木枯

角川書店

創立60周年記念

角川俳句叢書

うなさか

初
ゆ
め
の
さ
め
か
か
り
た
る
糸
紅
し

年
頭
の
濤
が
か
ぶ
さ
る
置
か
な

何も無きことなどはなし初景色

濤
一つ落ちて歌留多の夜が沈む

かの懸り羽子も夜雨にしづくすや

歌留多とる針やまに針刺してきて

鳥
追
の
手
甲
の
紺
の
餧
え
に
け
り

鳥
追
が
け
ふ
櫃
坂
を
越
え
來
し
と

獅子の笛ながれてひるの刻くづれ

誰ソ彼レの獅子の遠笛いたく寂び

初ゆめにいろありていろうすあさぎ

耿々と母と柱や花歌留多

御形摘む大和島根を膝に敷き

箱に入るくぐつのはは溢れけり

初
ゆ
め
の
筈
と
も
ど
も
倒
れ
け
り

野
に
ふ
か
く
少
年
鳳
巾
を
甚
振
り
ぬ

鬼房逝く砂に寒星ぶちまけて

松過ぎの附箋の手紙濡れて着く

手毬うた一つおぼえをさげすまれ

手毬つきつつ針千本をのまさるる

いとけなき數の手毬をついて見せ

手毬つく児のない子がひとりゐて

ふるさとの紙鳶は糸より暮れにけり

ふるさとや廐のすさびも枕上
ミ

戦
争
の
さ
か
ん
な
こ
ろ
の
獨
樂
の
紐

菘
蘿
葛
寂
しさ
こと
の他
なら
ず

まうしろに思ひのとどく氷頭膾

すがたなく声を見せあふ匂ひ鳥

酢を打つてゐるとき春の風邪ごこち

鶴は引く人差指のあひだより

眞
を
し
て
紅
梅
の
花
の
か
ず

生
半
老
い
て
海
参
に
手
を
つ
け
ず

見えて降る雨にもどりぬ
小水な
葱ぎ
摘

鰯
ごち吹きくづれたるきのふかな

鳥 帰る波のうしろも濡れてゐて

うなさかをのぼりつめたる朝寝かな

ひるよりも夜に旬あり魚田食ふ

淡雪の大きさは略きまりけり

さざ波はかへらざる波春ならひ

鶴は引くこころのなかに灯を入れて

見えてゐる人みなうごき水温む

淺葱はゆふべのいろとまぎらはし

老人の背に貼りつきし余寒かな

雪どけの仔細の朝でありにけり

三月を路地の奥より繙きし

引鶴の消えてしまひし飲み門かな

雛鮓の黄のことさらにおござりたる

ゆく雁の翅のうらよりナフタリソ

うすらひや空がもみあふ空のなか

しづかさをかこめる空や浮き氷

野遊びに家の柱を連れてきし

何んとなくかたちよろしき雛の日よ

山
す
そ
は
山
を
見
せ
ず
に
匂
ひ
鳥
隴
か
や
岡
持
の
な
か
小
ゆ
れ
し
て

春眠のなかぬけてゆくしつけ糸

痴をこそぐる雁の別れかな

あめつちのいづれともなし浮き氷

春なれや生きて忌日にかこまるる

春はあけぼの秋は日ぐれの落し紙

うなさかに朝寝の枕捨ててきし

雛の日の横みちを来て家に入る

草莽と言ふべき雛の夜なりけり

櫻もちやはらかきまま夜雨いたる

木蓮や肌と肌着にあはひあり

まちまちに降つて降りやむ春の雪

おぼろにもいくつかのいろいろすべにも

朝寝して伊勢の苦屋の貝すだれ

永き日を思ひあまして翅ふやす

鶯を聞いて濡れたる家に入る

摘草の帰りは糸にあやつられ

春やむかし騙されてゐしサー力スよ

そぞろ出て家に空ありお中日

永き日や簫に母をひそませる

風立ちぬいざまんさくの花のかず

草遊び空より道を引き出せり

草遊び帰りは雲と手をつなぎ

水に散りひろがる黄ナ粉百千鳥

永き日の土はあかるきままに暮れ

日が落ちて風がもの言ふ雛をさめ

鞆鞆をゆらして老を繕しけり

貝寄風はあまねく吹いて枝に熄む

何もせずゐて永き日を見透しぬ

春眠の波の一つに覺さるる
永き日の上枝ほ
つ
えと下枝し
づ
えとゆき亘える

おぼろとはかぶくものとぞ白襖

寝くたれの花のもみあふ風の枝よ

春のくれ我も近所の人ならむ

隠元の旬を濡れたる雲とほる

月おぼろ痒きところへ手がゆかず

てすさびの春の夜風や橋は浮き

春眠のなかにほどよき竹のかず

花ぐもり小またと言ふはどこならむ

春愁やからまることのなき小ゆび

可惜夜のとばくちにゐる黄
ナ
粉鳥

白泉に銃後の句あり大櫻

海市まで道なき道を征きし友よ

うぐひすのこゑが障子にたまるかな

永き日の水は水べにはびこりぬ

櫻見にひるから走る夜汽車かな

戦勃るか春泥に釘ばらまかれ

永き日の夕日をさをさ怠らず
水いろといふは何いろ春の夕

春 ふかし背ナへ着物を落しぬぐ

革帶に搏たれしごとく春は闌け

母上におよばざれども瑠璃揚羽

井戸のぞくときに顔あり暮の春

日永さや死ぬまでは死を持ちつづけ

ゆく春の水はすがたのままに暮れ

山吹の黄みどりの黄が飽きさせず

春の日のわれ椅子にあり埒もなき

うつそみを抓みて春をやり過ごす

家うちをひろくつかつて春惜む

太虚より落ちて來しなり蜥蜴の尾

行春や涙をつまむ指のうら

鱧の皮ねぢられてゐるは許されず

羯^{きあ}一^一諦^{てい}と啼^く死^ににぎはの十一^一は

祖春かな猫にかまける権未知子

しづくして大むらさきの病理かな

白桃や母なじるとき我薄れ

春ふかし粉ナ屋の裏は粉ナまみれ

夜
さ
り

戦中をころげまはりしラムネ玉

空井戸にいつか捨てたる花あやめ

すれちがひたるは母ともあやめとも

麥秋は鳥のはらわたまで達す

うらがなしオキシドールと花あやめ

冷し桃うらがへりたる捨身かな

死ぬとき間に間に合はせたる花あやめ

よく濡れるものに空あり花卯ツ木

白桃は逢魔ヶ刻を羽撃きぬ

抱きあつて黄なる溪蓀になり下る

晴子死す祭遠笛聞きながし

あやめまじならば日暮を嗜むらし

母と寝て淺葱のいろを持ち合はす

あやめ咲く箱階段を突き上げて

枕頭をよぎりあやめに逢ひにゆく

落ちのびてゆく麥秋に布吹かれ

ぼうたんの面テを両手にて擡ぐ

銀どろのろくぐわつ鳥の肝を刺し

犢 祭
鼻 に
禪 は
は か
一本 か
と せ
い ぬ
ふ 男
祭 水
か を
な 撒
く

冷し桃もの言ふことを封ぜられ

やや濃ゆく母に瓣ありあやめどき

更衣すめらみくには水に浮き

戀に死ねと仕掛け花火の赤目籠

衣食住のみか書寝も附いてゐし

浮橋をよくよくみればかきつばた

ろくぐわつの腐りはじめの鳥のこゑ

小夜ふけてあやめに修羅の走りけり

人死なぬ日のはかりけり氷水
櫻桃忌袖にされたるかの人よ

冷し桃人を殺めしことはなし

紺
絢
或
る
晴
れ
し
日
の
郡
か
な

亡き母とゐるろくぐわつの夕がれひ

忸怩たるろくぐわつ畢る貝柱

豊
葦
原
千
五
百
梅
雨
降
る
外
廁

ち
い
ほ
ばい
あめ
ふ
る
そと

芒種かな水ぬれのまま鴉とび

白桃や死よりも死後がおそろしき

はつなつの思はせぶりな中ゆびよ

蹠を晝寝せし間に偷まれし

白扇を家のなかまで使つて來し

ふるさとの夜をうすめる籠まくら

古戸戸をのぞけば夏の戦かな

とんでもゐる鳥に數あり半夏生

ふるさとの用無しの井戸とはの夏

手にふれしものを労る大暑かな

次の世も假初めならむ白透綾

晝顔や死んで生きるといふ手あり

家うちの階段ぬれず夏の雨

白地着てこころは水に濡れてぬし

夏瘦せといふ季語かつて
蔓延はびこ

やはらかに捕蟲網ごと攫はれたし

晝寝より覚めしところが現住所

天
井
の
う
へ
に
天
あ
り
水
中
り

大
川
の
夜
を
屢
叩
く
葭
障
子

戦死して蚊帳のまはりをうろつきぬ

蚊帳の中まで亞米利加が焼いてゆきし

白蚊帳にきのふの我が死んでをり

蚊帳の環かち合ふ伊勢の澳邊かな

くちびるを空にさしだす夏日かな

しるしらぬひとのあかしの盆踊

手をあげることも供養の踊かな

念佛踊こゑを落して手を空へ

盆踊佃はいまも水まみれ

人老いて供養踊の手をふやす

送りませ廁の中をふかめたる

抜け露地をぬけて佃の盆さかん

盆の月ひるのあかるさもちこたへ

盆唄は舟唄にして嘎れし

てのひらに雨をたしかむ魂迎
羅や夕日といふはないがしろ

瓜の馬あはれ水べに腐りたる

盆の月くすりのごとく零せり

青蘆の剛きそよぎの晩景か

おほぞらをひろくこなして盆の月

とまるまで鳥はとんで魂まつり

名
忘
れ
の
顔
の
い
く
つ
か
盆
踊

螻蛄鳴くと言ひし男に詰めよりぬ

寝冷人まなこで凝と我を見る

白
晝
とい
ふも
闇
なり
瓜
の
馬

ま
ひるま
の切
子
の形
な
の盲
ひ
け
り

白切子夜に入るとき身を覗ぐ

切子燈籠土のなかまで影をさす

朝すでに藻屑となりし母衣蚊帳よ

夏久し小糠といふは雨のこと

あけがたの幟のなかまでけものみち

白洲にて晝寝の母をゆりおこす

少
年
は
必
ず
老
い
て
夏
惜
む

白
地
着
て
雲
に
紛
ふ
も
夜
さ
り
か
な

火の入りし切籠は紙に攻めこまる

人なりに人は老いけり花めうが

まつたてに少年走る夏のくれ

両手もて口塞がれし冷し桃

はつたいは不承不承とこぼれけり

少年は蕩ける夏の限りかな

正体の無くなるまでに桃冷えし

一葉落つ柱のうらのけだるさに

貝
の
蓋

父老いて銀漢の尾を捌きをり

月のぼりくる兩袖をふりしほり

月光は簫のごとくあわただし

男ごゑよかりしむかし蟲送り

翅
うらは濡れずじまひの小夜の雁

しがらみと言へば戀なり冷し葛

老人を巻きこんでゆくけいとう花

月光がくる釘箱をたづさへて

蟲の夜の御櫃の籠の弛みかな

軍服はたるみ銀河にぶらさがる

萩紅ししだるる花をゆるがせに

天の川われも鱗はしろがねぞ

人老いて月夜の蓼をたべし夢

待つとなく素逝忌がくる數珠玉よ

ふるさとや柱を齧るきりぎりす

雁病んで畠の縁を通りけり

ところはに月ぶらさがる物ならむ

我が入る墓もきめずに墓参り

夜よ
興こ
引びき
や
飯噉む
顎のかつ
かつと

月よりも古きものなし抱きまくら

病
雁を庇ふ襖を引きにけり
情^{つれ}
なくてうごきづくめの水の月

帝
劇
の
舞
台
に
雨
や
幸
彦
逝
く

朝
の
雁
こ
ぼ
し
た
る
數
お
ぎ
な
は
ず

障子しめて物にかかることが了る

はるばるときて雨月なり貝の蓋

ふたりして笑うてをりぬ墓参人

まなじりに墓参の人をうかがひぬ

生きてゐるうちは老人雁わたし

蟲繁くなる身のうちの瘤かな

秋ふかし眼をやるたびに水は濡れ

夜晚くかりがね病むを告げにきし

墓参人面テを白く曝されし

月光ははばたき水に火傷せり

行き暮れて萩の下枝の鬼房よ

いざよひとりなりて消えゆく水泡や

天の川
熟^ゆ水^ざは死^まのごとく在り
れ^まは死^まのごとく在り
綴^まは死^まのごとく在り
れ^まは死^まのごとく在り
刺^まは死^まのごとく在り
せ^まは死^まのごとく在り
母^まは死^まのごとく在り
を^まは死^まのごとく在り
金^まは死^まのごとく在り
輪^まは死^まのごとく在り
際^まは死^まのごとく在り
底^まは死^まのごとく在り
ふ^まは死^まのごとく在り

色鳥が畳つめたくして去りぬ

かりがねのきのふや紅き紐まぎれ

掃
苔
の
帰
り
ち
ち
は
は
手
を
つ
な
ぎ

秋
の
夜
の
火
を
落
と
す
て
ふ
奥
の
こ
ゑ

秋
ふ
か
し
雨
と
い
ふ
字
は
零
し
て

袴
檔
に
ま
ぎ
れ
こ
み
た
る
病
雁
よ

お迎への提灯がくるむくげ色

肝臓も漆紅葉もよく濡れて

十三夜ならで墨田の覗殻

花川戸二タ夜の月のはざまかな

銀
泥
の
一
夜
た
り
け
り
菊
供
養

うすらひのごとく空あり菊の塵

笄をひるの銀河に匿しおく

子どもには子どもが見えて秋のくれ

秋のくれ途方に暮れしにはあらず

きりぎりす繡帶よりもむずがゆき

賜
晴
や
も
の
を
拾
ふ
に
影
か
が
め

菊
月
の
水
の
ゆ
く
へ
の
井
桁
か
な

桃ほどに腐いた
まづに柿寂びびにけり
桃ほどに腐いた
まづに柿寂びびにけり

深秋の入をおもへば遠ざかる

憂國忌列を亂してゐるは誰ぞ

深爪をして鶴わたる夜を過ごす

障子しめて人は零になりにけり
蝶が贏る
女や中洲の蘆を刈り忘れ

残菊の紅のすたれも花川戸

おほぞらは微熱なりけり穴惑ひ

枕
べを火照る火照ると鶴が過ぐ

文机の端より萩は黄ばみけり

残年やあらき思ひに障子見る

鶴の手をひいてよこぎる奥座敷

赤わたを二の句もつかず啜りこむ

盲ふまでまひるの萩は刈られけり

鶴
わたり
ゆく
振り
假名
をこぼしつつ

寝入りばな葱の白さに搏たれたる

人老いて障子の夜をなしくづす

ひる啼いて夜のこゑする秋沙かな

空はまた時雨づもりや貝の蓋

日の暮をととのへてゐる障子かな

夕風邪やこころおきなく雲ながれ

ひるながら黒衣なりけり木賊刈

鏡 荒れ鶴はたちまち妊りぬ

風邪ごこちしてみをつくしみをつくし

鳥たちや見せ場をつくる秋のくれ

おなじ人ふたりとはぬず暮の秋

不忍や鴨のこゑする小抽斗

梶がみじかき着物きせくれし

家 裏 で 鶴 手 な づ け し 少 年 よ

荒 淫 か 火 事 の あ り た る ひ る 下 り

水湧やどこにぬようと日は西に

かそけさが障子の棧に流れをり

家々はうつむきがちに夜の餅

むらさきにちかきくれなゐ鶴の疵

太
陽
は
古
く
新
し
敏
雄
の
日

風邪も
らひたる
ゆふぐれは
萌黃いろ

木賊刈顔のなかよりもの言ひし

ゆふぐれの木がらしは血をまぜて吹く

冬雁や夕日あびれば誰も老い

根深引く男といふは煙なり

天災にまさる戦災白障子

短日の障子あかりの靠れ合ふ

つはぶきの黄におよびたる二伸かな

風邪の身を置きざりにして水暮るる

鶴
守
は
蔽
し
蔽
し
と
ね
む
り
け
り

木
賊
刃
鏡
を
割
つ
て
あ
ら
は
る
る

赤わたといふは阿漕なものならむ

虎落笛抱き抱かれして人は老い

雪の暮さばかるるもの何も無し

かたちなき物には雪のござり降る

龍の玉こぼれて人は冴ゆるかな

青海鼠拗ねてこの世の爲ならず

纖きものは雪かと母に尋ねらる

木賊刈まとひしものがありあはせ

年とつて雪の日ぐれや徒に過ぐ

羊齒刈は夕日くすねて帰りけり

數学はみじめなりけり雪被り

氷魚捕が細みの発句ものにせし

夜に降る雪こそ雪と思はるる

人戀ひのかたちに鶴は凍りけり

龍の鬚墨はいたいけなく減りぬ

かたち見せ雪がふるふる夕がれひ

鶴 雪
守 泥
の み
咽 た
に る
あ 晩
を 年
き の
棘 夜
刺 空
さ か
る な

好雪や母よりわれは古くなし

鱈子酢手もと不如意とつぶやける

天すでに本降りならむ凝り鮒

何もかも母在りしゆゑ細雪

夜
さ
り

三
四
〇
句

畢

本集は前句集の『天袋』につぐ私の第五句集である。平成九年より平成十六年半ばまでの三四〇句を納め『夜さり』と書名した。句の陳べ方はこのたびは歳時記に倣つて新年の句を頭に置いたのは私の生れが一月一日であることも気分しているように思えてうれしい。書名は集中の、

白地着て雲に紛ふも夜さりかな

の句から抽いた。夜さり、は私の幼児のころに祖父や父が日常に使つていた日本の古く美しい言葉の一つであろうと思う。集中の鶴や母や病雁と同じように私の俳句の本質のところにある言葉で、わけたく親しさを感じている。

本集は私の七十代の作品集で当然の事乍ら老の句もかなり収めてある。老の句を意識して詠まないという人もいるが、七十代の生理は五十代、六十代とちがうのは自明の理であり、ひらき直るという言葉は好きではないが、ここまでくれば極く自然に老を詠めばいいと今は思つてはいる。青春の日に青春を讀えて詠んだように、滋味ふかき老を詠みこたしたいと念じてはいる。

本集の上梓には『あらくれし日月の鈔』『天袋』につづいて装丁の伊藤鑑治氏、角川書店のスタッフの皆様のお世話になつた。記してお礼を申し上げる。

平成十六年涼月

八田木枯

著者略歴

八田木枯（はつた こがらし）

大正十四年 伊勢の津に生まれる

昭和十六年 「ホトトギス」 同人長谷川素逝に師事

昭和二十年 俳誌「ウキグサ」を主宰、橋本鶲一の選を受ける

昭和二十二年 山口誓子の門に入る

昭和三十二年 これより二十年間、休俳

昭和五十二年 盟友うさみとしおと二人誌「晩紅」創刊

昭和六十二年 「雷魚」創刊同人に加わる

平成八年 寺澤一雄・中村裕たちと晩紅塾ひらく

平成十五年 新同人を迎えて「晩紅」復刊

句集に『汗馬楽鈔』『あらくれし日月の鈔』

『於母影帖』『天袋』

初版発行

一〇〇四年九月十七日

著者

八田木枯

発行者

田口恵司

発行所

株式会社角川書店

101-817 東京都千代田区富士見二一十三一三
電話〇三一三八一七一八五三六(編集)

編集製作

株式会社角川学芸出版

印刷所

株式会社三協美術印刷

製本所

株式会社鈴木製本所

© Kogurashi Hatta 2004 Printed in Japan
ISBN4-04-651842-1 C0092

句集

夜さり